

論文

## 神谷美恵子と長島愛生園

——ハンセン病から精神医学へ——

田 中 真 美\*

### はじめに

本論文の目的は、神谷美恵子が長島愛生園で精神科医として関わった実践を明らかにすることである。

神谷美恵子の研究に関しては、神谷の「生涯」や「業績」に関するものと、「著作物」をもとにした研究、そして、ハンセン病の隔離政策と神谷のことについてのものなどがある。

たとえば、『生きがいについて』がハンセン病の隔離政策を容認する材料になったという批判を行っているのが武田<sup>1</sup>の論文や多摩全生園に勤務する鈴木<sup>2</sup>の著書等であり、以降の文献はそれをそのまま踏襲している。しかし、それらは、神谷の書いたもの、かつ、公刊されている著書の一部を切り取って批判しているものであり、神谷の実践を知らぬまま批判している。先行研究では、神谷の実践とテキストとの関係が明らかにされていない。筆者は、神谷のテキストがその背後にある実践があって初めて書かれたものと考え。所以、その実践を追える限り追うことに意義があると考え。従って、本研究では神谷が精神科医師として如何なる実践を行ったか、それがテキストに如何に表現されているのかについて論考する。本論文がその第一歩である<sup>3</sup>。そして神谷自身の生い立ちの中でハンセン病の医療者をめざし戦前に行った長島愛生園での医学実習の時から、精神科医師となり、東大医局に勤務し、そののち、結婚、阪大の精神科医局からの調査で13年ぶりに長島を訪れたことから長島愛生園に関わるきっかけとなったことなども時系列の研究がなく、神谷美恵子（当時、前田美恵子）の東大精神科医局勤務のときと、長島愛生園で精神科医としての実践を考察する研究はない。

神谷にはすでに著作集もあり、書かれたものの多くはそれで読むことができるが、筆者は、神谷の実践した長島愛生園を調査して、それらに現われない部分についても知ることができた。

そこで本稿では、神谷の著作の丁寧な読解とともに、当時を知る複数の人々へのインタビュー調査、さらに長島愛生園の神谷書庫にある資料を参考にして、神谷とハンセン病との出会いから医師を志すさまを描く。そして、ハンセン病について医学生として興味を持ちつつも医師としては最初に精神科に進んだことを論じていく。また、1943年の医学実習、1944年から2年間の東大精神科医局での仕事、1957年から精神医学調査に行ったことがきっかけとなり、長島愛生園の精神科医として関わるようになった実際を時系列で概観する。その後、長島愛生園において精神科医療に初めて関わった実践を含め、時系列で検証した。

### 1. 医師を志すことになった経緯

初めてのハンセン病患者との出会いは、1933年（昭和8年）神谷が19歳の時のことである。母方の叔父である金沢常雄が無教会派牧師をしており、その叔父が奉仕で通っていたハンセン病施設多磨全生園でのオルガン演奏を頼まれて行くことになった。そこで献身的に看護に尽くす三上千代看護師<sup>4</sup>の姿に心を打たれ、自分もらいの医療に尽く

---

キーワード：神谷美恵子、ハンセン病、精神医学、長島愛生園

\*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2010年度入学 公共領域

すことに心を動かす。それは神谷にとって志に結びつく“愛”との生涯最初の出逢いであった。

こうしたハンセン病との出逢いがあり、津田英学塾で学びながら、女子医専の願書も取り寄せて医学へと進む準備を始めたが、両親の反対に遭い、医学への道は棚上げにされてしまうのである。

1935年(昭和10年)肺結核で転地療養し、一年後気胸術により快方に向かうが、主治医からは、「いったん治っても再発をする恐れがあるから、5年間は結婚を考へてはいけない」と忠告される。25歳の神谷にとって5年後は30歳である。「25歳のわたしにとって一生の生き方を考へよといわれるほどの重みをもっていた」(神谷1980:93)と記しているように、神谷の生涯の生き方にも関わる主治医の言葉であった。

1938年渡米、コロンビア大学大学院でギリシア語を学び、フィラデルフィア郊外の学寮ペンデル・ヒルに滞在する。1939年、父親に「ハンセン病医療に携わらない」と約束して、コロンビア大学理学部医学進学コースに入学することができたが、らいに関わることを再び反対され、結核患者の予防医学へと進む決意をし勉強を始めた。しかし、日米関係は悪化の一途をたどり1940年7月帰国を余儀なくされた。

翌年、1941年(昭和16年)27歳で女子医学専門学校本科に編入する。そのころは、男女共学の医学部がない時期であった。女子医専での新しい生活は神谷の好奇心をみだし、若い男性医師が前線に送られていたため、国内の主力は女性医師の時代でもあり、神谷は意欲的に医学の道に邁進している。刊行されている1942年からの『若き日の日記』の中には、戦時下の厳しい時代に多くの書物を読み、医学志向と文学志向の両立に悩みながらも英語の書物を読み、翻訳の仕事や家事手伝いや友人との付き合いをした様子などがある。神谷が女子医専2年のときその頃ハンセン病研究で知られていた太田正雄教授<sup>5</sup>に出会い、その研究室でらいの組織標本を見て、神谷の関心は、らい菌に向いていた。そして太田の『現代のらい問題』を再読して一生らいの研究に献身したいと決意し将来研究室に入れて頂きたいと手紙も書いている。太田教授は隔離には反対の立場をとりながら、研究室で動物実験などらい菌培養研究に取り組んでいる。神谷の日記には、休みの日にも兎に注射する場面が登場する。この様に1942年の日記は、医学の勉強に邁進する記述が多い。太田教授の病理研究を深めるにつれて神谷のハンセン病の療養所での臨床への関心は高まっていった。

1943年、父親が新潟県知事になることに決まり、療養所の見学ならばと許しが得られた「6月1日 父上、見学になら、らい院へ行ってもよしと言われる」。(神谷:1984:96) 両親は、7月に新潟に出発する「7月6日 夜10時35分の汽車で両親新潟へ向けてご出発」。(神谷:1984:103) 12日間の実習体験を積む旅立ちの夜に記したものが残されている。

約10年も前のこと、ひとつの「生きる意義」raison de vivre を喪って、宙に漂う私の前に、東京府下全生病院ライ療養所見学の際、新たな「生きる意義」として現れたのがライへの奉仕ということだった。爾来様々な紆余曲折はあったけれど、私のひそかな希いと歩みは、ほとんど、常にそれに向けられていた。今や医学校卒業の日も来年に迫っている。果たしてこの方向が単なる主観でないかどうか、確かに自分に運命付けられたものかどうか それを見窮めるために今私は岡山の国立愛生園ライ療養所へ旅たとうとしている。あそこは何が、どんな生活が待っているのだろうか。

昭和18年8月4日 旅立の夜

東中野にて記す」(神谷2004:32)

1943年(昭和18年)、神谷29歳、初めての長島愛生園での見学実習。光田と初めての対面を果たすのである。光田67歳、長島愛生園の園長になりすでに12年が経過していた。神谷の実習日記によると、1943年8月4日、東京から夜行寝台列車で岡山へ向かい、岡山から一時間ほど列車にのり、虫明港から乗船して到着したのが5日の夕刻、東京から一日かかっている。翌日の午後、神谷は光田と面会、この初めての対面は死体解剖室であった。神谷29歳の時のことである。

1943年8月6日の日記に、光田との初めての対面のことについて記している。その中には、実習生として来た自分にあまりに気さくに話しかけられ「あの有名な光田園長とはきづかなかった」(神谷1980:173)と記している。

当時は戦争中で、愛生園の収容人数2009名、医師は4名。施設内で死亡した患者の解剖が義務付けられていたと

きである。神谷が日記に、「あの有名な光田園長」と記述しているように、当時、光田は園長になって12年、らしいの医療に尽くしたいという気持ちをもっていた1943年当時の神谷にとって光田との最初の出会いは、感動を表す描写になっている。

長島での実習は、神谷にとって貴重な経験となった。連日の暑さの中での解剖に立ち会い、顕微鏡を覗き、らしいに関する世界的な研究書に触れることができ、そして入所者とのふれあいや現場で仕事をする医師や看護師たちとの交流など、寝食をともにし、同じ「生活の場」で医師として働く姿に都会の医師では感じられない感動と力強さを感じた。長島での実習最終日の日記に、最後のあいさつのやり取りの場面での出来事を神谷は印象深く記している。

「いつですか、卒業は？」看護師長さんが机から赤い顔をあげてたずねた。「来年の秋です」「そうですかー。待っていますよ」「ええ、待っていてください。」(神谷1980;181)

と、卒業後の長島での勤務を約束するくだりがある。この口頭での約束を果たすことができなかったという気持ちだが、のちに神谷が実習日記を公表することに繋がる。

## 2. 精神科医師を志すまで

ハンセン病への思いを断ち切らせたのは、両親の強い反対に加えて、かねてからつきあいのあったX子の存在であった。神谷より5才年下の知人の妹で、非定型性精神病であり、X子の主治医である東大精神科医局医師島崎敏樹<sup>6</sup>と出逢った。島崎医師からブンケ、クレッチマー、ヤスパースなどの著書を紹介され、精神医学の世界に圧倒された神谷は、

「生まれて以来、思ってもみなかった人間の精神の世界の深みが急激に目の前に開けてきて圧倒されるばかりである。幻視、幻覚、妄想、人間のところにこんな不思議な現象が起こりうるとは、女学校のころから人間の心というものに最大の関心があったつもりなのに、こんな重要な世界を知らないで済ませていたとは」(神谷1977:47)

と記している。しかしながら、精神医学の関心も深まりながらも療養所への思いは残っている。

「9月15日宮島先生が見えたので駅までお送りしながらお話した。先生は、らしいの療養所には指導者がいないから卒業後、1～2年太田先生のところで基本的な研究方法を身につけ、その上で療養所へ行けと仰せられる。なるほどと思った。」(神谷:1984:117)

「9月20日 卒業後の方針につき父上とお話した。臨床をやらないという条件で太田先生のところに弟子入りしてよろしいとのこと。療養所入りは勿論ご反対。」(神谷:1984:118)

療養所入りを反対されたものの、関心はらしいに引き寄せられていた。父親は、臨床はやらずに、らしいの病理培養の研究をしていた太田教授のもとでの研究ならばという意向をもっていた。

神谷が医学実習から帰って一か月後に草津で開催された研究会には、光田をはじめ、太田正雄も参加して白熱した議論が交わされた。

「9月29日 太田先生の存在は、恰も兎ども間に於ける獅子のごとく王者然として、その語るや猛然とたてがみをふるうがごとく感ぜられた。先生の動物実験に関して如何に批判あろうとやはり先生の素質は、どの学者よりも一段とぬきんでいていると思った。」(神谷:1984:121)

実習から帰ってのちも療養所に行くことを反対され、1月12日の長島愛生園への思いを断ち切った日の日記に

「1月12日 すべて人世にあらゆる希望を棄てたような心境にあったとき、レプラというものに出会い、これに対して、強く相通するものを感じ、結局これが根本動機となって医学を志したのですから卒業後、この方面に進めたら主観的には、やっぱりいちばん本望であるように依然思いますが、私の性質とか今までの経路、教育等から客観的に見て他の方面で働く方がもっと多くのものを生かすことができるというのなら、愛生園への感情的な（傷？）あこがれも切り捨てねばならぬのかもしれない。これから、卒業までの間、なるべく大きな立場からよく考えて行きたく思っております」（神谷 1984:148）

と記している。

1943年暮れごろからに神谷の日記には、松沢病院や東大の精神科を見学し、精神医学の研究を深めていく記述が多くなる。そのような日々においても、精神科医としての道を歩むことを悩みつつ、卒業後の進路に迷う神谷の姿も記されている。X子の主治医であった島崎敏樹が再び、日記に登場する場面がある。

「2月7日 午前さぼって帝大へ。内村先生<sup>7</sup>の御回診についてまわり、あとの医局員のポリクリのようなのにも出てから、内村先生とお話し、後、島崎先生に私の卒業後の方針について相談にのって頂いた」（神谷 1984:151）

そして、精神科へと惹かれてゆく神谷の日記は、続いている。

「2月21日 要するに学問的に行っても、奉仕の形態から言っても、精神科の方に惹かれる。女学校時代からの心理学的興味は、ここで初めて実を結ぼうとし、また、実際の仕事としては、レプラのように偶像化される恐れが一切ない。それなら何故、まだ迷うか。この社会から抜け出たいというあの昔ながらのセンチメンタリズムの故であろう。精神科へ行くことが自分にとってあまりにも多くのよい条件をもたらすということが空恐ろしい。人の心を探求したいという自分の知的欲求に存分に従ってよいなんて、勿体なさすぎるし悪いような気がする。毎日あんまり考えて、夜眠りながらも考えていると見えて、絶えず、眼が覚めてしまう。そうして、昼間は、ぼんやり夢見ていることの方が多い」（神谷 1984:152）

1944年2月23日の日記には、

「2月23日 午前休んで内村先生に御面会し、九月入局と決定、少々気焰をあげすぎておもはゆい。後明石さんと一緒に島崎先生とお話した」（神谷:1982:49）

卒業後の進路を東大精神科医局に決めた神谷は、精力的に精神医学の勉強を深めていく。

1944年4月16日の日記には、島崎敏樹に精神科医局に入るまでに読む本を訊ねている

「4月16日 島崎先生にあそこに入るまでに読み置くべき本を伺ったら Japanese:Psychopathologie,E,Stern: Psychopathologie, 村上仁氏『精神分裂病の心理』の三冊を貸して下さった」（神谷:1984:170）

その他に、日記には、ヤスパースなど、精神医学に関する著書を読む記述が続く中、精神医学の研究を深めながら、卒業に向けての医学の試験を受けていった。

戦争の影響で1944年9月東京女子医専も半年短い就業期間でくりあげ卒業式を挙行了した。女子医専を首席で卒業した神谷は、戦争が激化する時期の10月10日、東大精神科医局へと正式に入局し、精神科医としての仕事を始めた。このとき、すでに30歳を超えた神谷にとっては、今後の生活についてのことは関心事の一つであった。結核に罹患し転地療養をし、気胸術により快方に向かったものの主治医からは、「いったん治っても再発をする恐れがあるから、

5年間は結婚を考えてはいけない」と忠告された時期だったからである。「25歳のわたしにとって一生の生き方を考えよといわれるほどの重みをもっていった」（神谷 1980:93）と記しているように、30歳という年齢は、神谷にとっては大切な起点の年でもあった。

戦況が厳しくなり、翌1945年元旦は空襲だったという日記から始まり、1945年には空襲の被害の記載が多くなる。同年3月10日、歴史上にも残る東京大空襲は、その被害も大きく、焼失家屋30万戸、罹災者100万人、死者10万人余りと日記にも記している。東大精神科医局では戦争の被災者の治療に明け暮れ、5月には、神谷自身も自宅が焼け、被災者の身となり、厳しい戦争状況が敗戦まで続くこととなる。

戦況の悪化の中にも関わらず、精神科医としての仕事に充実感を記す日記の記載が続くが、8月13日、800機の艦上機が来襲して、長野県なども被災したと記されている。そして、終戦を迎えた8月15日の日記には

「安田講堂に学生、職員集合、ラジオにて、大詔を拝す。満堂ただ、すすり泣きあるのみ。一日中呆然とし、夕方に至り仕事にかかる。」

と書き、なお仕事をし続けているが、その後、GHQとの交渉をはじめ、英語仏語の通訳や翻訳に携わることになった。これは、当時英語を通訳できる人材が文部省に一人しかいなかったため、語学の能力のある神谷に依頼されたからである。文部大臣を務めていた父親が退任後後継大臣の安部能成<sup>8</sup>の仕事も助け、精神科医師として東京裁判の被告人大川周明<sup>9</sup>の精神鑑定にも加わった。

1946年5月23日、最後の仕事を終え大学へと帰ることができたと日記に記している。25才で結核に罹患した時30歳までは結婚を考えるなど言われていた神谷は、その30才を過ぎ結婚し、東大へ一週間に何日か通ってはいた。しかし、復員して研究を始める若い研究者たちをみながら、すぐに長男を妊娠したことから医学教室から離れて家庭生活を中心に営む時期に入る。1947年に長男、1949年には次男を出産し、育児に多忙な日々を送る。その後、育児を中心にした家庭生活に入り臨床の世界から離れる。1951年、関西へと引っ越しをし、1952年、東大の内村医師の紹介状をもって、阪大医学部精神科に入る。週に一度医局会に顔を出すようになり、その時の様子を

「昭和24年から主人が東大から阪大に移るようになったので、わたしたちは、26年関西へ移住した。内村先生から大阪大学の精神科教授堀見太郎先生へ紹介状をいただき、その教室に入れていただいたのはその後間もない時だったと思う。大阪大学精神科の学風はそのころのドイツ風のそれとはひどく異なっていて、まるで別の国にきたような気がしたものだ。学術用語から考え方までこうも違うものか、と驚きつつ、一日も早く慣れるためにアメリカ文化センターから新着の精神医学書を借りてきては、育児や家事の合間にせっせと読みふけた。アメリカ精神医学の影響が強かったその頃の阪大では、いわゆる精神身体医学の研究がさかんで、結核と精神の関係が追及されていた。「だれか、らいをやらないか」あるとき、堀見教授が医局会で言われたことがある。あとで聞いたところでは、この「らいと精神」というテーマを考えついたのは当時の医局長、岩井豊明であったという。堀見先生は、しばらく皆の顔を見まわしておられたが、誰も志願するものはなかった。「わたしにさせてください」という言葉がこみあげてきたが、やっとの思いでおさえた。まだ幼い二人の子をどうするつもりか。」（神谷 1980:137）

と記している。

1953年、次男が粟粒結核になりストレプトマイシンなど薬品代捻出のために自宅でフランス語塾を開き、最盛期には、一日9時間、週にのべ50人教えたと日記には記されている。家事やアルバイトに追われながらほそぼそと精神医学の勉強を続けているとき、「らいと精神医学」を提案していた堀見教授が亡くなり、神谷の身内が難病に罹患するなど身近での心痛の出来事が続く。そのような中、1955年、神谷に初期の癌が見つかり、ラジウム照射で食い止められたことがきっかけとなり、夫の勧めで、らいの精神医学調査の申し出をすることになる。

### 3. 精神科医師として

13年ぶりに訪れる島の「らいと精神医学調査」をするための研究方法が金子教授とともに検討され、患者に面接して生活歴や病歴などを聴きだす方法と、文章完成テストや欲求テスト、ロールシャッハテスト、などの結果を総合して調査することに決まる。

島に滞在して1957年4月7日から10日間の調査を皮切りに1958年にかけて50日間にわたり9種類のテストを行い終了した。神谷自身が考案した精神医学調査のSCT（文章完成テスト）などを含む調査の結果をもとに次のように書いている。

「らい菌が延髄より上まで昇った例は、脳膜に発見された一例を除いて報告されたことがない、脳の解剖所見でも生前の神経学的検査でも中枢神経系に特殊な点はみとめられない。らいに特有な外因性精神病と言うものはないという結論になった。らいに罹っている精神病患者となると、普通の人はらいにかかっているということだけで死ぬほど悩むが、精神病患者は、自分のらいまで否定してしまうことがあり、またらいをあまり気にかけなくなる人が多い。このためか、精神病に対する薬も一切拒否してしまう人がでてくる」（神谷：1980:151）

「精神病の他に心因性の精神障害、すなわち神経症や心身症はもちろん多い。おそらく一般社会より多いであろう」（神谷：1980:152）

らい菌が原因となる精神病はないが、らいによる心因性の精神障害は多いと述べている。

調査に通う間の1957年8月、光田園長は退職し、後任に高島園長が就任した。高島園長との初対面では、島の精神科医療に驚愕した神谷は、次のように言及している。

「10月30日島行き・高島重孝園長と初対面。エネルギーを感じ。精神病患者がらいの治療も精神病の治療もうけずに放置され、不潔な状態におかれているのは、国辱ですね。「それじゃ、あなた、やってください。」誰か来てくれる精神科医が見つかるまでできる範囲でわたしがくることになってしまった。高島先生は、早速、精神病棟建設の抱負を語られ、設計図を、治療を、とどしどし注文される。」（神谷1980:195）

放置されていた精神科医療に言及した神谷の提案により、一精神科医師として神谷が長島愛生園の精神科医療と関わることになる。

「もう一つのショックこそ、現在に至るまで島と私とを結びつけるきっかけになってしまった。それは、園内の精神病患者の実態を調査したときに見た光景である。老朽化した木造の小さなバラックに、いくつか板敷の座敷牢のようなものが並んでいる。その一つ一つに、垢にまみれた患者が閉じ込められていて、文字通り、荒れ狂っているのがあった。「天井からは埃でよごれたクモの巣が、まるでワカメのようにぶらさがり、これでも、人間の住む場所かと思われるような有様でした」と当時の主任看護婦（現在外科婦長）田中孝子さんは、記している。」（神谷：1980:140）

と、『愛生誌』の1962年7月号に掲載された田中婦長の文章を引用して当時の「とけん舎」と呼ばれた場所の様子をその様にして書いている。そこには精神科医療も届かないどころか、らいの治療も行われずに放置されていたのである。

「精神病患者が恐れられていたためであろうか。らいの新しい治療薬も、この人たちには注射されることがなかったから、戦中にみた患者さんたちのように、からだは、最悪の状態にあった。また、精神科の方でも戦後、良い薬物が次々と開発されているのに、その方面の治療ももちろん、受けていない。要するに医師も看護婦もこの「とけん舎」にはよりつかず、ここの住人は療養所でありながら、医療の対象になっていなかったのである」（神谷：1980:140）

「悪臭ふんぷんたる中で、精神病患者たちの怒号がとびかう。番をしている軽症患者の人も窓格子から食事をさし入れするだけで、まったくお手上げのようであった。わたしは、つねづね、精神医学史を勉強していたので、ピネルの時代を連想しないではいられなかった。フランス革命時代に、彼が精神病患者を鎖から解放したという話——。そのころの状況もこんなものだったろうか。しかし、少なくともあの頃のフランスの精神病患者たちは、らいまで背負っていなかっただろう。」(神谷：1980:141)

高島園長から、精神科での医療の担当を頼まれた神谷は、1957年11月から一般舎にいる精神障害者の患者を診に行くことになる。

「ひどく扱いに困る患者さんがでると、地元の大学からその時だけ精神科医を頼む。精神科医は、一応の指示を与えて帰るが、あとあとまで面倒をみるわけではない。アメリカの国立らい病院でも同様であった。おそらく、こういう歴史がずっと愛生園でもあったのだろう。聞くところによると、園の「一隅」にあった「監房」の中に閉じこめられていた精神病患者もあったという。「監房」とは、園の患者で反社会的傾向を示す者を監禁するために造られたコンクリート造りの牢屋のような建物で、島の中のくぼんだ地形のところにあった。戦後、患者さんたちの抗議により、今では、すっかり土で埋められて、あとかたもない。要するに精神障害者は、症状によっては、犯罪者なみに扱われていたのであろう。」(神谷：1980:145)

「こんな歴史のあったところへ、その歴史自体知らぬ私のような者が、辞令さえもらわずに、ことのはずみで入り込むことになったのであった。まったく、初めの数年間は医官でも嘱託医でもなく、完全なもぐりであった。」(神谷：1980:145)

偶然に引き受けた精神科医としての仕事を行っていたところへ新任の宮内医師が来ることに決まった。1958年9月24日、新しく来た宮内医師に精神科医の仕事を引き継いだ。

「9月24日 新しく就任されたM医師と小一時間話す。まだ若い、小柄な、柔和な方。たえず、ニコニコして、ちっとも、緊張したところがないのを好ましく思った。これで島の精神科も安心できる」(神谷 1980:198)

精神医学調査を終えた最後の日記には、

「9月26日 朝から2つの調査の統計的処理、これで一連の調査も終わり、講義も終わり、明日、島を去る。M先生が来られたから、もう私の仕事は完了のはず。ほっとしたような、淋しいような気持ち。子供を巣立たせたあとの親の気持ちは、こんなもんだろうか。」(神谷 1980:199)

精神医学調査を終えた神谷は、島の精神科医療を宮内医師に託し、島をあとにした。

しかし、10ヵ月後の1959年7月、宮内医師の退職により、再び、神谷が島へと通う日々が始まる。その後、いろいろな患者を診察したと日記に記されているが、この時の様子を見ていた加賀田<sup>10</sup>は、著書の中で神谷の様子を記している。

「私が非常に感動したのは先生の考え方でした。わたしはこんなところに入ってまで朝から晩までがなっている人が近くの監房にいるので「困るなあ」と思っていました。それを先生は「隔離されている中で隔離されている人がいる」と言われました。わたしはその言葉にはっと気がつきました。同じ病気なのに、確かにそうだ。隔離されながら、さらに偏見をもって隔離している。偏見の中に偏見がある、ということを感じられるのが先生の素晴らしさでした。神谷先生は、人間はどんなに精神病を患っていても愛情は、通じるという信念

をもっておられたと思います。統合失調症の患者さんを看護婦さんが散歩させるときは必ず一人に二人がついて歩きました。それを神谷先生は、お一人で五、六人と一緒に散歩しておられました。何人かでピクニックに行く姿を見かけたこともあります。」(加賀田：2010:200)

その様子を自らの日記の中に

「7月21日 一時に患者のNさんとランデブ。万霊山のあずまやで二時間ほど彼の話聞きながら、時々、居眠りがでる。彼のIQは、80ぐらい？小心で依存性がつよく、愛情に飢えている。幼児期から他人にいじめられてきているからだ。先生、ずっとここにいてください。と何度も言う。そのあとで、第一病棟の精神病患者を診る。」(神谷 1980:205)

と書いている。

1960年ごろから、厚生省では、らい療養所における精神医療の必要性を認め、全国11の療養所を3ブロックにわけてブロック別の精神病棟を建てる計画に着手していた。そのブロックの一つが「瀬戸内三園」<sup>11</sup>で、三園の精神病患者を収容する施設が長島に建てられることになり、その案件で専任の精神科医師が必要になった。そのために神谷は全国の大学の精神科の教授に手紙を書いたり、大阪大学精神科医局の同窓会誌にその主旨を掲載したりした。そのときのことを高橋幸彦は語る。<sup>12</sup>

「誰かわたしに代わって愛生園の精神科の診療を続けてくださる方がおられたら、連絡くださいと書いてあり、電話をしたんです。そのとき、ハンセン病の療養所であることも全く知らなかったんです。電話したら、神戸女学院を訪ねていくことになって。先生に私つとめさせていただきたいとお話しすると、そしたら、神谷先生、まあまあ見学してから決めてくださいと言われて。「今度7月の何日に行きますから、一緒に行ったらどうですか?」と言われ、初めて長島愛生園を訪れました」

1962年、新しい精神科医として高橋幸彦が来ることになった日のことを神谷は日記に記している。

「7月8日 午後外来が終わるころ、高橋幸彦氏。初めて島に姿を現す。(神谷 1980:222)」

これにより、精神科は二人の担当となった。

園内では、午後1時から夜8時ごろまで外来診療の他、さらに園内では、疎外されがちだった結核病棟入室者との面接なども行い、当時1500名の入所者に対してわずか6名の勤務医だけで苛酷な勤務状況だった。他の先生方の当直勤務が少しでも楽になればと神谷は当直も申し出ていたと高橋幸彦医師は証言する。当時の当直医師は、激しい神経痛を訴える人のための「ダンケルン」の静脈注射をすることだったが、深夜にも往診しなければならず、島の端に位置する新良田地区まで片道20分ほどの道のりを徒歩で往診することも重要な仕事の一つであった。

1965年には、精神科医長となり、1966年7月には、「第5病棟」が発足した。1959年7月から島での仕事を再開することになり、再び、月に2～3回、2泊から4泊の官舎住まいをしながら精神科医としての仕事をするようになる。1962年には高橋幸彦が赴任し、二人で、交代で仕事を行うが、1970年、高橋の退職により、再び、一人で精神科医療の仕事をするようになる。1964年に新幹線が開通するまでの当時は、交通の利便性も悪く、土曜日の未明に自宅を出て、電車・汽車・小さな船と乗り継いで5時間余りの時間をかけて、月に2回～3回、島内の宿舍の2泊から4泊しての勤務だった。夏休みには、一週間ほど滞在したり、隣の邑久光明園や大島青松園などの仕事もこなした。精神科医師としての実践の他に島内の看護学校や新良田教室<sup>13</sup>での講師として教鞭をとり、島内にある盲人の「青い鳥楽団」やライトハウスでの交流、ラジオ放送を通じて独学でフランス語を学んでいた入所者にフランス語を教えた。また、勤務の悩みの相談をする医療従事者からの相談など、島に滞在する時間を費やし、身を粉にして動いていたと、当時のことを高橋幸彦は証言した。



当時の長島愛生園では、療養所内でも、精神障害者をはじめ、結核、梅毒の患者は疎外されていた。そのような状況の中、五病棟で精神障害者が安心して暮らせることを神谷は望んでいた。

「一般の社会と同様、らい園社会の中でも結核、梅毒、精神障害の人は疎外されており、とりわけ、精神障害者に対する理解を得ることはたいへん難しいが、看護にあたる人びとの努力により、次第にそれが増しつあると言ってもよいであろう。松と海にかこまれた小高いところに建てられたクリーム色の「五病棟」こそ精神医療のたいせつな根城である。」

(神谷：1980:152)

一方で神谷は、五病棟に入室するひと以外にも、一般舎で暮らす人の中にも精神の病気を持つ人には、外来や往診などで診察をしていた。

「精神病のほかに心因性の精神障害、すなわち神経症や心身症はもちろん多い。おそらく一般社会よりも多いであろう。この人たちは、「外来」や「往診」の形で診てきた。その上、内科や外科、眼科など、各科の合併症で「入室」している人をも、医療スタッフの依頼や本人の希望によって「往診」してきたことは総合病院における精神科の役割を示すものであろう」(神谷：1980:152)

『人間を見つめて (1974 改訂版)』所収の島日記には、精神科医として実践した診察や往診をしたときの様子が簡単に記されている。その「島日記」は、1970年2月19日の記載を最後に終わり、1971年は高橋が退職し、神谷が一人で月に2回通ったが、体調を崩し、退職を決意した1971年の最後の日記には

「12月29日 ここ数日毎朝左肩痛し。ニトログリセリン錠を飲むと治る。思えば癌以来17年間よくも体がもってきたものだ。これが第二の余生ならこれからは、第三の余生。それはもっと短い可能性がある。一日一日を感謝していきよう。」(神谷:1982:187)

と記し15年間島へ通った神谷は、1972年4月付で退職したのである。

## おわりに

本稿では、初めてのハンセン病患者との出逢いからハンセン病に関わる医師を志し、長島愛生園での12日間の医学実習を経験するが、両親からの強い反対に遭い、精神科医師となり東大精神科医局に2年間勤務したことを時系列で記した。そして、敗戦後、結婚し、臨床の世界とは離れ、育児をしながら関西へ引っ越し、阪大の精神科医局会に参加するようになった。1943年8月の医学実習から13年ぶりに訪れた長島愛生園での精神医学調査を行った1957年4月7日からのこと、光田園長から引き継いだ高島園長に島の精神科医療が放置されていたことに驚愕して進言したことがきっかけとなり、1957年11月から精神科医師としての実践を時系列で検証した。

1957年の精神医学調査は、神谷が独自のテストを考えたものだった。

「3月2日 午後医局へ 金子先生にショーの原文なしと申しあげたら「神谷式」を作ったらよいと言われたので勝手に作る事にした」(神谷:1982:122)

「3月2日 朝から夕方まで夢中で「(原文ママ)」神谷式 SCT [文章完成テスト] をこしらえ、又精神構造調査用紙をこしらえた。夕方印刷やへ。」(神谷:1980:122)

『『生きがいについて』』には、「特に後半で、愛生園で得た資料がいわば主役を演ずるような形になっている。しかし統計やアンケートや心理テストの結果は、すでにいくつかの論文にまとめたので、ここではほとんどふ

れていない。それに人間の生きがいというような奥深い問題を探求する上で意味のあるものは、むしろそうした機械的な調査のあらひ網の目からは洩れてしまうものなかにふくまれていると思われ、そういうこぼれ落ちたものの中から材料をひろいあげた」(神谷:1980:10)

こうして神谷が独自で作り上げた SCT 文章完成テストのあらひ網の目から洩れたもの『生きがいについて』<sup>14</sup>に記されている。

1960年代、神谷の通っていた当時の愛生園には、約1200名の病者が入園していたが常勤医師は5名、神谷が当直を希望したのは常勤医師の激務の緩和もその目的のひとつでもあった。精神科医師として通った当時を知る高橋幸彦は神谷の当時の様子を

「病棟で療養生活を送っている病者以外に、島に散在して生活している病者の自宅にも往診しなければならなかった。らい性神経痛のために夜中に体調を崩す病者があれば、酷寒の深夜であろうと、山道を一人あるいて往診した。診療の合間をみては、園内のライトハウスによく立ち寄った。」

と当時20代後半だった高橋幸彦は述べている。

1998年にまとめられた長島愛生園自治会史『曙の潮風』の中には精神科の欄に神谷の取り組みが記されている

「愛生園の精神科医療は、神谷美恵子医師が初めて手をつけた。1958年(昭和33年)「一連の精神医学調査を行って見たときには、内因性精神病の人たちに対してさえ、ほとんど何の医療も行われていなかった。」(神谷美恵子「長島愛生園の精神科医療について」)状態であった。1960年(昭和35年)8月、厚生省は、らい療養所の精神病棟の整備計画を立て100床をブロック別にわけ、愛生園には30床が瀬戸内三園の共同として配分された。1967年(昭和42年)3月、精神病棟は第五病棟として近代的な装いをもとに開設されることになった。らい療養所の中で、精神病患者が医療の対象として扱われるようになるには長い年月を要したのである。」(長島愛生園入園者自治会:1998:148)

神谷の著作の中で中井久夫が

「島の診療記録からの症例を読むと、看護をもケースワークをも含み、さらにそれ以上の広がりを持っていたと感ずる」(神谷:1980:314)

と書いているように、神谷の実践は、島の広い範囲で行われ、しかしながら、それが広く知られることがなかったのは、精神科にかかる人、精神障害者が島内で疎外され差別されていたことも一因である。神谷の精神科医師としての実践の実際を知るために、筆者が調査を始めたころもインタビュー調査においては、精神科医師としての神谷を知る入所者からの聞き取りは困難を極めたのである。

現在、長島愛生園には神谷が通った当時のカルテも保管されており、神谷が実際に記載したカルテをみることができたが、しかし、現在カルテの使用に関する研究倫理上の問題については確認中である。そのため、本稿では使えなかったが、今後可能ということになれば、それを用いて神谷の長島愛生園での実践を明らかにして検証していきたいと考えている。

## 注

- 1 武田徹, 1997, 『隔離という病』講談社. 武田は、北海道新聞(2007年8月19日)神谷批判をしたことについて、「だが、それはむしろ、「読まれ方」の問題だったのかもしれない。」と記している。
- 2 鈴木禎一, 2003, 『ハンセン病人間回復へのたたかい —神谷美恵子氏の認識に就いて』岩波出版サービスセンター、初出は「多磨」

1996年8月—2000年7月号

- 3 筆者は、社会福祉学の中で知識・技術ばかりが論じられ教えられ、個人の人生や生活、生きることに関わり添う様な実践を行う動機となるものや背景などについて伝えられていないのではないかと疑問を抱いてきた。そのことが、長島愛生園における神谷の寄り添いの実践に関心を持つきっかけとなった。
- 4 三上千代は、1891年～1978年。ハンセン病に尽くした看護師、多摩全生園、バルナバ医院や全生病院でも勤務した。三上千代は、三井慈善病院の看護婦養成所を出てその前の年から一年間、全生病院での実習を終えて、バルナバ病院に行くときに、光田健輔と出会っている。
- 5 太田正雄は、筆名を木下空太郎といい、若き日には、与謝野鉄幹、北原白秋、吉井勇や平野万里とともに、多くの詩や戯曲を書いた。
- 6 島崎俊樹 1912～1975 精神科医、神谷美恵子の兄の友人の妹X子の東大精神科医局主治医。神谷が東大精神科医局入局時に指導を受けた西丸四方の実弟。島崎藤村の兄の子供
- 7 内村祐之 1897～1980、精神科医。神谷が勤務した当時、東大精神科教授、松沢病院院長。
- 8 安部能成 1883～1966 弊原内閣の文部大臣。神谷美恵子の父親前田多門から引き継ぎ文部大臣となった。
- 9 大川周明 1886～1957 日本の思想家、民間人として唯一A級戦犯で裁判にかけられた
- 10 加賀田一 1917～2012,1936年に長島愛生園に入園。その後、神谷美恵子の通っている当時の自治会長、その他、全患協の中央委員などもしていた。
- 11 瀬戸内三園 国立ハンセン病療養所の瀬戸内の3園（長島愛生園、光明園、大島青松園）
- 12 高橋幸彦医師へのインタビューは、2012年9月6日午後4時～午後6時茨木病院会議室にて研究についての同意書を記入のうえ行った。
- 13 新良田教室 1953年（昭和28年）改正のらい予防法で高等学校設置について明文化され1955年（昭和30年）9月16日開校した高校、1987年（昭和62年）32年間397名の卒業生を送り出し、閉校した。
- 14 『生きがいについて』（神谷：1980:98-110）

## 参考文献

- 青柳緑, 1965, 『らいに捧げた八十年——光田健輔の生涯』新潮社.
- 荒井英子, 1996, 『ハンセン病とキリスト教』岩波書店.
- 江尻美穂子, 1995, 『人と思想——神谷美恵子』清水書院.
- 今井真子・堀薫夫, 2010, 「神谷美恵子の『生きがい』論の生成過程に関する一考察」『大阪教育大学紀要』59（1）:151-172.
- 伊藤麻子, 1998, 「神谷美恵子の人間観」鳴門教育大学大学院学校教育研究科修士論文.
- 井上謙, 1941, 『詩集 緑の岩礁』財団法人長島愛生園慰安会.
- 上田政子, 2009, 「生かされる日々 らいを病む人びとと共に」皓星社.
- 内村祐之, 1968, 『わが歩みし精神医学の道』みすず書房.
- 大西基四夫編, 1991, 『まなざし——ハンセン病に耐え抜いた人々』みすず書房.
- 岡野久代, 2006, 『歌人 明石海人 ～海光のかなたへ～』静岡出版社.
- おかのゆきお, 1974, 『林文雄の生涯 救難使徒行伝』新教出版社.
- 大岡信, 加賀乙彦編集, 2002 『ハンセン病文学全集』皓星社.
- 加賀田一, 2000, 『鳥は動いた 隔離60年の体験から「小島の春」はいま!』文芸社.
- , 2010, 『いつの日か帰らん』文芸社.
- 神谷美恵子, 1980, 『生きがいについて』みすず書房.（初版1966年）
- , 1980, 『人間をみつめて』みすず書房.（初版1971年）
- , 1973, 『極限の人』ルガール社.
- , 1977, 『神谷美恵子エッセイ集Ⅰ—教育・人物篇』ルガール社.
- , 1977, 『神谷美恵子エッセイ集Ⅱ—いのち・らい・精神医療』ルガール社.
- , [1980]2004, 『遍歴』みすず書房.（初版1980年）
- , 1982, 『日記・書簡集』みすず書房.
- , 1984, 『若き日の日記』みすず書房.
- , 2001, 『神谷美恵子日記』角川書店.
- , 2004, 『神谷美恵子の世界』みすず書房.
- 小杉世, 1998, 「ウルフと精神医学——神谷美恵子とM・フーコーとの関連において」『ヴァージニア・ウルフ研究』15:1-15.

- 河野和子・外口玉子編, 1980, 『らい看護から』 日本看護協会出版会.
- 好善社, 1978, 『ある群像 好善社 100年の歩み』.
- 国立療養所大島青松園入園者自治会 50年史, 1981, 『閉ざされた島の昭和史』 入園者自治会.
- 犀川一夫, 1996, 『ハンセン病医療ひとすじ』 岩波書店.
- 佐藤幸治, 1968, 『人間の存在意義——神谷美恵子“生きがいについて”』 講談社.
- 佐藤睦子, 2000, 『神谷美恵子の思想に関する人間学的研究』 京都女子大学大学院文学研究科教育学専攻修士論文.
- 坂田勝彦, 2012, 『ハンセン病者の生活史』 青弓社.
- 杉村春三, 2007, 『新版 癩と社会福祉 らい予防法廃止 50年前の論考』.
- 志樹逸馬, 1984, 『島の四季 志樹逸馬詩集』 編集工房ノア.
- 島田等, 1973, 『らい』 21号、長島詩話会.
- 鈴木しほ, 1998, 『神谷美恵子の精神医学とハンセン病者観』 埼玉大学教育学部卒業論文.
- 宮原安春, 1997, 『神谷美恵子——聖なる声』 講談社.
- 武田徹, 1997, 『隔離という病』 講談社.
- 鶴田一郎, 1999, 『神谷美恵子の『生きがい研究』——その契機と過程』 『人間性心理学研究』 17 (2) : 164-175.
- 長島愛生園自治会史, 1998, 『曙の潮風』 日本文教出版株式会社.
- 水島和也, 1968, 『詩集 つくられた断層』 長島患者自治会文芸協会.
- 原田禹雄, 1979, 『麻痺した顔—らいの検診カルテから—』 ルガール社.
- , 1983, 『天刑病考』 言叢社.
- , 1992, 『この世の外れ』 筑摩書房.
- 堀田善衛, 1945, 『深い淵から らい患者生活記録』 新評論社.
- 松岡弘之, 2011, 『隔離の島に生きる』 ふくろう出版.
- 宮崎かずえ, 2012, 『長い道』 みすず書房.

# Mieko Kamiya and the National Sanatorium Nagashima-Aiseien: Hansen's Disease and Kamiya's Psychiatry Training and Practice

TANAKA Mami

## Abstract:

This paper describes the chronological history and practical experiences of Mieko Kamiya as a psychiatrist at the National Sanatorium Nagashima-Aiseien, in Okayama, Japan. Previous studies on Kamiya have outlined her biography, achievements, and literary works and have researched her work related to the quarantine policy for patients with Hansen's disease. However, little attention has been paid to how she became a doctor of psychiatry and what practical experiences she had as the psychiatrist in the sanatorium. The study is based on unpublished writings and literary works, documents at the National Sanatorium Nagashima-Aiseien, and in-depth interviews with people who live there. The paper chronologically outlines Kamiya's studies and career up to when she became the first psychiatrist of patients with Hansen's disease in the sanatorium and evaluates her medical practice there. In her psychiatric practice, she did not only serve at the sanatorium. She also taught at the nursing school and the high school on Nagashima Island, listened to and gave consultations to nurses, taught French to patients with Hansen's disease, and supported a local orchestra whose members were visually impaired.

Keywords: Mieko Kamiya, psychiatry, Hansen's disease, National Sanatorium Nagashima-Aiseien

## 神谷美恵子と長島愛生園

——ハンセン病から精神医学へ——

田 中 真 美

## 要旨：

本論文の目的は、精神科医としてハンセン病患者に向き合ったことで知られる神谷美恵子が、長島愛生園（国立ハンセン病療養所）を中心として岡山県長島で行った諸実践を明らかにし、その意義を検証することである。

神谷に関しては、その数多い著作の分析や、ハンセン病の隔離政策との関係を扱った研究があるが、精神科医師としての側面に焦点を当てた研究は存在しない。本研究は、①著作の内容、②筆者が長島愛生園で行ったインタビュー調査の成果、③愛生園所蔵の資料の総合的検討からなる。

本論文では、まず神谷が愛生園で初めて精神科医療に従事したという事実を明らかにした。次に、神谷が長島で行った数々の実践——精神科医療、看護学校での教育、高校教員、看護師の相談相手、入所者へのフランス語教育、園内の患者の楽団との交流など——を検証した。その結果、神谷が長島で行った多様な活動には、医療の枠を超えた臨床実践としての意義が認められた。

